

地球

第六卷第參號 大正十五年九月一日

太平洋地域の探検と開發 (中)

小 川 琢 治

東亞の海岸に於けるアラビヤ人の船舶の來船に續いて蒙古民族の元國を支那本部に建てた時代に支那人の海上に活動した事蹟は我々日本人に在つては弘安の戰役によつてその失敗の例のみを記憶するが、忽必烈汗の威力は南海の諸島を征服朝貢せしめ、マルコ・ポロの南海航行は畢竟その勢力發展の際に出來たのである。元史によればその遠征の最も著しきは至元二十九年(一二九二年)泉州から出發した史弼等の江西湖廣三省の兵二萬舟千艘の大艦隊で、十二月冬の北東氣節風を利用して支那南海を渡り、四月夏の南西氣節風に乘じて凱旋してゐる。此の前に十七年から二十三年までの間に廣東から出發した達魯花赤楊庭璧等の使節の派遣によつて蘇木都刺 *Sumatra* を首めスンダ海峽十國の來貢を促した。

然れども支那民族の遠洋航海の空前絶後の記録といふべきは明の成祖(永樂帝)の時に建文帝の海外に逃れたかといふ嫌疑と武威を外國に耀かさんとする虚榮心で艤装した所謂三保太監鄭和王景弘等を遣はして西洋に通じた大艦隊である。明史宦官傳の記載によれば

永樂三年六月命和及其儕王景弘等、通使西洋、將士卒二萬七千八百餘人、多齎金幣、造大舶修四十四丈者六十二、自蘇州劉家河、泛海至福建、復自福建五虎門揚帆、首達占城、以次徧歷諸蕃國、宣天子詔、因給賜其君長、不服則以武懼之、

といひ、金力と兵力とを振り蒔いたのである。その遣り方は支那の帝王の太腹な處で、西洋の探検船が海外の遺利を蚤取り眼で探し廻るのとは全く趣の異つてゐるのが面白い。

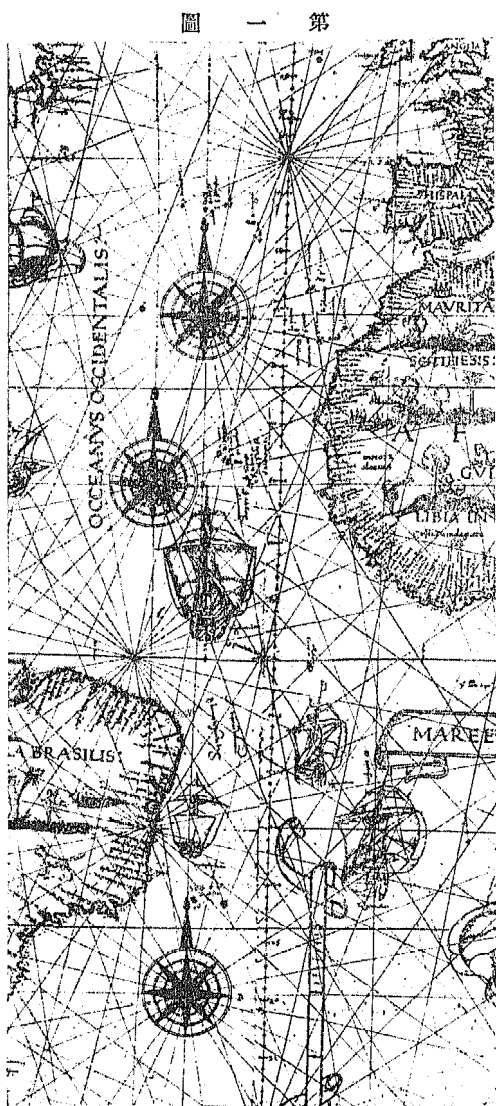
その寄港した土地に關する記載は一行の馬觀の遺した瀛涯勝覽及び費信の星槎勝覽に詳かで、占城、瓜哇、舊港(三佛齊)、暹羅、滿刺加、啞魯、蘇門答刺、黎伐、南淳里、錫蘭、阿枝、古厘、溜山牒幹、祖法兒、阿丹、榜葛刺、忽魯謨斯を含み、特に瓜哇、舊港等には當時既に廣東及び漳泉人が多數移住してゐた事情が注意すべきである。舊港(バレンバン)に就いて馬觀はその今日の所謂華僑の移住の歴史を語つて洪武年間に廣東人陳祖義なるものが家族を挈げて此處に逃げて來てその頭目となり、鄭和の往つた時に同じく廣東人施進が之に代つたといふ。是によつて察すれば第十三世紀末の元人史弼等の遠征した前後には既に移住が行はれてゐたことが想像される。

鄭和の艦隊の往つた地方はセイロン嶋、カリカット、ホルムズ、アデンに及び、鄭和は二十餘年間に前後七回まで此等の地方を見舞ひ、明國の海上の勢力は遠く印度洋岸に波及した。十四年前セイロン嶋のガル角で永樂七年鄭和第二回航海の紀功碑(漢、波斯タムル三國語)が発見せられたので明國艦隊の運動の證左が彌々確實となつた。

日本の海賊船及び商船の南方海上に活動したのは弘安役頃から始まつたのであらうが、臺灣、呂

宋古城等に達したのは恐らくは遙かに晩く西洋船の東來と前後するものかと推測される。

太平洋上に東來した歐洲諸國の探検者の先登は葡人であつた。歐洲西南角に蕞爾たる小國を建てた葡國に不世出の傑人ドン・ヘンリケ・エル・ナブエガドル Henry, the Navigator (Navegador) が第十五世紀の初めにいで、一四一六年までの間に航海探検の奨勵に畢生の精力を傾注した結果として、マデイラ(一四一九年)アゾーレス(一四三二年)等の發見があつて、一四四七年シラレオネ海岸まで南進した。その甥に當るアンフランソ第五世がこの雄圖を繼承したので、一四八六年に至りバ



ルトロメウ・デイアズの喜望峯廻航路の發見まで漕ぎつけた。これと前後して一四九二年

西國の艦装したコロンブスの探検船が西印度諸嶋に達し、西向慕進する冒險の意外なる成績が世界の耳目を聳動することとなり、終に葡西兩國間に新發見地の占有權に關する問題が惹き起されて、羅馬法王アレキサンダー一世の裁決により有名なるトルデシラス條約が一四九四年六月に成立して、大西洋の中央（アゾーレス及びマデイラ嶋の西方百リーグの海上を通ずる子午線を以て分界線 *line of demarcation* として、是より以西は西國以東は葡國の勢力範圍を認めることになった。

上に掲ぐる地圖は一五二九年デイヒゴ、ロペロ Diego Robero が西國王の命を受けてセブ井ラで作つて此の條約の分界線を示したものである。（線と點とを書いた子午線がこの線である）

第十五、六世紀に跨がつて葡西兩國の海上探検が兩方面に分れることとなつたのは此の協定による重要な結果であつて、太平洋上に西洋人が現はれるに當り、葡人が印度洋岸の方面から東印度諸島に來り、西人が續いて南米洲の南端を廻航して太平洋を横斷して呂宋に達するに至つたのである。

一四九五年マヌエル大王が葡國王位に即くや、デイアスの大發見後約十年間忽諸に附して西國に一步先んぜられた所を鋭意恢復せんとし、一四九七年ブスコ、ダ、ガマを派遣し、非洲の東岸の探検を繼續せしめ、南緯三度のメルンデまで北進し、是から南西信風に乘じ翌年五月二十日印度の西岸カリカットに達した。此の旅行の結果は此の時まで久しくアラビヤ商人の壟斷せる印度洋上の地方に葡國勢力の侵入を意味し、一五〇〇年ベドロ、カブラルの有力なる艦隊は武力を用ゐアラビヤ勢力を驅逐する計畫なりしも、赤道海流に送られて偶然にブラジルを發見せるに至り、一五〇五

年ダルメイダ印度副王となつて派遣され、ダブケルク之に次ぎ、一五一〇年ゴアを占領し、西方ツコトラ、オルムズ（忽魯謨斯）等を占領して埃及亞拉伯の貿易交通の路を絶ち、東方はマラッカ（一五一年）を根據地としてモルッカ諸嶋にまで進み來り、一五一四、五年の交には支那に到達し、一五一七年にはダンドラデの一大艦隊が送られ、此の時臺灣を望みつゝ沖繩諸島にも來たらしい。

明史によれば葡人（佛郎機）の使臣の支那に來たのは正徳十三年（一五一八年）で、澳門即ち阿媽港に根據地を定めたのは地方官民の私利を獲たので政府の退去せしめんとする禁令の行はれなかつた結果であつた。萬曆四十二年廣東總督張鳴岡の蕃人をして倭寇を驅逐せしめた時の上言に

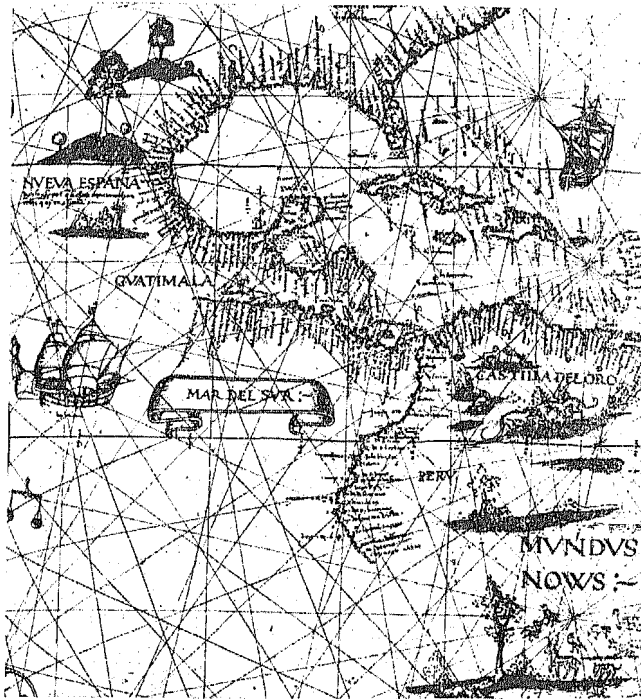
粵之有澳夷、猶疽之在背也、澳之有倭賊、猶虎之傳翼也、今一旦驅斥、不費一矢、此聖天子威德所致、惟是倭去而番尙存、有謂宜勦除者、有謂宜移之浪白外洋、就船貿易者、

といひ、種々の處分案はあるが結局は之を留めて倭寇を防禦せしめるがよいとの結論で、「以夷制夷」の套常手段として葡人の澳門の租借地を明國政府が認許したのである。

葡人の東進して支那に達した事件に伴ふ耶蘇敎の宣傳は晉唐間南海の航路を利用した南天竺からの佛經輸入や、亞拉伯人の回々敎の輸入と趣を一にし、而かもその宣敎師等の活動は近世東西交通に特種の色彩を與へた。葡國の偉人ヘンリク親王當初の目的が貿易上の勢力範圍を擴張すると同時に耶蘇敎の信仰を異敎徒の世界に宣傳せんとするに在つて、この精神は第十六世紀の東來者間にも横溢し、火器を右手にし、聖典を左手にして新らしい發見地に行動した。この氣運を代表したのは新敎の分離によつて歐洲の西北に失つた羅馬法王の勢力を東南の新天地に扶植せんとした耶蘇敎會

即ちデニスウィット派の布教で、その太平洋岸に來着した最初の代表者がフランソア、ド、サブ井エ François de Xavier であつた。サブ井エは一五四二年五月初ゴアに上陸し、一五四九年（天文十八年）八月十五日鹿兒島に來着した。但し最初の葡人は天文十年七月豊後神宮寺浦に入つた明船に搭乘したものであつたらしい。

第二圖



西國ではコロンブスの新大陸發見があつて東亞に達する西向最短航路の一半が事實となつた結果この目的を選せんとする努力は發見者自身の一五〇二、四年の第四回に續いてピンゴン（一五〇七年）デ、ラ、カザ（一五〇八年）等が中米の東岸を探検して西方に出づる通路を發見せんと試み、一五一三年九月ワスコ、スニエス、デ、バルボア Balboa はパナマ地峽を横つて初めて太平洋を望見し、此處で見た海面を南海 Mar del Sur と呼んだ。然れどもこの地峽を越えて船舶を通ずる大計畫

は四百年の後まで實現される途が開けななんだ。

この時に當り葡人マガリヤンス(マヂェラン) Fernão de Magalhães が出で、ポムヘル王の冷遇に不平を懷き、ダルメイダの艦隊に加はり東印度航路に精通せる智識のカスチル(西國)朝廷に利用さるゝことになつたのは、リスボン朝廷としては前にコロンブスを失つたと同じ過失を再びした楚材晉用の奇異な運命といふべきである。

是に先ち西國ソリス、ピンゾンの探検(一五〇八年)によりブラジルの沿岸は今のウルガイ國のサント、マリア角まで追跡されてゐたのであるが、マヂェランは一五一九年九月二十日サン、ルカルを解纜し、二〇年一月ラ・フラタの河口に至り、十月二十一日處女角 Cabo de las Virgines に達し是から四週間砲丸の届くかと疑はるゝ狹隘な海峡を通過してその西口に出たのは十一月二十八日であつた。

マヂェランは智利の海岸近くを北進した後に西北に向ひ一五二一年三月六日ラドトロネス、(マリアナ)諸島のグワム等を發見し、フネリツピンに達し之をサン、ラザル諸島と呼んだ。然れども四月二十七日マヂェランはセブ對岸の一小嶼マクタン島でセブ土人の手に斃れ、香料諸島(モルッカ)に達する能はず、甲比丹セバスタアン、デル、カノのフネクトリア號が十八名の海員と共に滿三年の後にもとのサン、ルカル港に歸着して、最初の世界週航に成功した。此の發見の結果として一五七一年にマニラ港が南海に於ける西國勢力の根據地として設けられることになつた。

葡西兩國の關係は西國フネリツプ二世が葡國王冠要求に勝ち葡國を併合するの成行を來し、一

六六〇年葡國に革命が起りブラガンザ公がデヨアレ第四世となつて王位に昇るまで一時競争が止み東印度に於いて葡國の試みた植民貿易の政策に大蹇跌を生じ、再び起つことが出来ななのは無慘である。之に反して西國は一五一六年カルロス一世即位の後獨逸皇帝に選まれてカール第五世となり、一五五六年太子フヰリッヅ第二世が之に嗣いだ間の國運は隆々として、墨哥秘露智利西印度フロリダ(二五二〇、四〇年間)等を占有し、屢佛國に捷ち舊教の宣傳をつとめ、セルブワンテス、ブエラスケス等の文藝名家の出た一時期を成した。然れどもフヰリッヅ第二世の晩年は西國々運の下り坂を意味し、一五八七年にドレークの襲撃を受けてカデス港が焼かれ、一五八八年にグラナダアルマダが全滅して海上の覇權はその手を離れつゝあつた。

葡西兩國の海上競争が第十六、七兩世紀に亘り東印度を中心として行はれつゝあつた間に、稍後れて競争に加つたのは英蘭兩國であつて、葡人の喜望峰廻航路と西人の南米廻航路とに對して、別に航路を求めるには餘す所は歐亞大陸の氷海に沿ふた北東通路 Northeast Passage と北米洲の氷海に沿ふた北西通路あるのみ。故に第十六世紀に英國から艤裝した探檢船は北大西洋の東西兩側に沿ふて進み北極探檢の歩を進むる功績はあつたが、東洋に到達する徑路を発見するに至らなんだ。

英國の海上に於ける發展の第一歩はフランス、ドレークのペリカン號の世界週航であつた。ドレークは一五七七年十二月十三日フリマスを發し、翌年九月廿五日マデラン海峡を通過し、是より北緯四八度まで南米洲西岸を北進し一五七七年九月廿五日香料諸島に達し、ハルマヘラ島の西岸

ナルナラの會長と丁子一手供給の契約を結び一五八〇年九月二十六日英國に歸着した。此の冒險の成功に次ぎカブエンディツシュの第二の世界週航（一五八六、八八年）があつて、大アルマダの殲滅と相俟つて英國々旗が太平洋上に翻ることゝなつた。而して海上權の輸贏の決せらるゝ際に起つた事件中注意すべきは一五九二年ラルター、ラレーの指揮の下に行動したバーローのアズレス島に埋伏して西國東洋航海に従事する葡國船マドレ、デ、デオス *Madre de Deos* 號を捕獲したことであつた。此の船は九月七日ダートマスに曳き込まれたが、レデンホールに提出された鹵獲目録によれば長さ百六十五尺千六百噸の巨船で香料藥品絹織物カリコ等少くも十五萬磅と評價された貨物を積載してゐた。英人は此の鹵獲によつて初めて多年知らんと渴望せる東洋貿易の秘密の鍵を握つたのである。

マドレ・デ・デオス號鹵獲後四年にウツドのベア號が艤裝され、一五九六年七月頃出發したが半途にして海員が病死して四名となり、その唯一人がブルト、リコに着せるのみで全く失敗に歸し、續いて倫敦商人及び冒險者 *Adventurers* の組織する東印度貿易を目的とする會社の創立が企てられて、デヨン、ランカスターの赤龍號が一六〇〇年二月十三日ウリツチ港より解纜し、一六〇三年九月十一日恙なくダウンスに歸着し、初めて成功の曙光が認められた。此の探檢船の出發と同年に會社の創立がエストミンスターで調印され *The Governour and Company of Merchants of London Trading into the East Indies* といひ、十五年間エリザベス女皇の特許を得る筈であつた。是が後に一七〇八年に至つて *United Company of Merchants of England Trading to the East* に合併されて、世界的植民帝國建設の礎石を成したのである。（未完）